



|            |   |
|------------|---|
| Title      | 北米における沖縄県出身移民に関する地理学的研究：ハワイ一世移民の現地調査事例を中心に(1)   |
| Author(s)  | 石川, 友紀  |
| Citation   | 移民研究 = Immigration Studies(9): 41-62  |
| Issue Date | 2013-09   |
| URL        | <a href="http://hdl.handle.net/20.500.12000/29174">http://hdl.handle.net/20.500.12000/29174</a> |
| Rights     |   |

## 北米における沖縄県出身移民に関する地理学的研究 －ハワイ一世移民の現地調査事例を中心に(Ⅰ)－

石川友紀

- I. はじめに
- II. 研究調査の計画・実施
- III. ハワイ一世移民の現地調査事例

キーワード：ハワイ、一世移民、沖縄県出身移民、面接聞取調査

### I. はじめに

世界における日本人移民の歴史は、いまや1868年(明治1)のハワイへの契約移民から数えると145年目、本格的な同地への集団移民としての官約移民の1885年(明治18年)から数えても128年目を迎えることとなる。一方、沖縄県からハワイへの初回の契約移民も1899年(明治32年)に那覇港を出航しているため、本年(2013年)で114年目となり、ゆうに一世紀を超えている。明治・大正・昭和・平成をへてきた日本人移民は一世は少なくなり、その子弟の二世・三世から四世の時代に移り変わりつつある。かれらは日系人と称されるが、その人口も増加し、現在約300万人と推定されている。

第二次世界大戦前、アジアから出た移民の数では、中国人移民(華僑)、インド人移民(印僑)について、日本人移民は第3位に位置していたのである<sup>1)</sup>。この過去1世紀以上の日本人移民の歴史は、現在外国人労働者として移民を受け入れている状況からすると考えにくいかもしれないが、第二次世界大戦前及び戦後も経済の高度成長期以前までは、日本も出移民国のひとつであったことを思い起こしてほしい。とりわけ、沖縄県にあっては戦前・戦後とも移民の数が多く、世界各地へ発展し、活躍していたので、「移民県」と称されていた。1990年沖縄県主催で5年毎に開催された「世界のウチナーンチュ大会」は、2011年までに5回にも及び、多くのイベントを通して海外在住の県出身移民と県民とをつなぐ架け橋となった。海外移民に関する事象は、沖縄県にとって極めて高い意義を有するのである<sup>2)</sup>。

琉球大学法文学部地理学教室の教員スタッフにより、1992年度から1993年度の2年間、文部省の科学研究費補助金を得て、「北米における沖縄県出身移民に関する地理学的研究」のテーマのもと、県出身一世移民の現地調査を行った(表1)。その調査国(地域)はアメリカ合衆国のハワイ州(オアフ島・マウイ島・ハワイ島)とカリフォルニア州(ロサン

表1 研究組織

| ふりがな<br>氏名                 | 年齢 | 所属機関・部局・職名      | 専門領域  | 学位    | 役割分担      |
|----------------------------|----|-----------------|-------|-------|-----------|
| ○研究代表者<br>いしかわともり<br>石川友紀  | 52 | 琉球大学法文学部<br>教授  | 地誌学   | 文学博士  | 総括        |
| ○研究分担者<br>なかやま みつる<br>中山 満 | 56 | 琉球大学法文学部<br>教授  | 人文地理学 | 文学博士  | 集団形成調査担当  |
| 研究組織<br>しまぶくろみぞう<br>島袋伸三   | 53 | 琉球大学法文学部<br>教授  | 人文地理学 | M.A.  | 経済活動調査担当  |
| まえかど 寛<br>前門 寛             | 39 | 琉球大学法文学部<br>助教授 | 自然地理学 | 理学博士  | 自然環境調査担当  |
| まちだ むねひろ<br>町田宗博           | 37 | 琉球大学法文学部<br>助教授 | 地誌学   | 教育学修士 | 社会・文化調査担当 |
| いしまるてつじ<br>石丸哲史            | 29 | 琉球大学法文学部<br>助手  | 人文地理学 | 文学修士  | 経済活動調査担当  |

注 年齢など各項目は1992年現在のものである。

ゼルス市・サンフランシスコ市), カナダのブリティッシュコロンビア州 (バンクーバー市) とアルバータ州 (レスブリッジ市) であり, 県移民の面接聞取調査と移民関係資料の収集を行った。調査実施後すでに20年を経過しているが, 戦前渡航の一世移民が非常に少なくなりつつある現状に鑑み, 同プロジェクトの調査研究の概要および現地調査の事例の一部でも記録に留めておきたいと思い, 本稿で取り上げた次第である。なお, 文部省の国際学術研究・学術調査においては, 同テーマによる3年目の計画として, 1994年度にメキシコのメキシコシティ市においても現地調査を実施する予定であったが, 予算が認められなかったので断念した。また, この計画より以前に12年間文部省の科研費による「南米における沖縄県出身移民に関する地理学的研究」を実施してきた<sup>3)</sup>。その際には現地調査後, 調査総括として報告書の作成まで経費が認められていたが, 本北米移民にはそれが認められなかった経緯がある。その後, 2000年度から2003年度までの4年間「旧南洋群島における沖縄県出身移民に関する歴史地理学的研究」(研究代表者石川友紀) のプロジェクトが実施され, 同名の研究成果報告書が2004年琉球大学法文学部より発刊されている<sup>4)</sup>。

## II. 研究調査の計画・実施

### 1. 研究の目的・組織

本調査研究の目的は北米における沖縄県出身移民(以下沖縄移民と略称)の地理学的研究を通して, 日本移民の本質を明らかにすることである。調査の必要性は(1)これまで



写真1 ハワイ沖縄県系移民の現地調査メンバー  
前列：左から中山・石川・島袋，後列：左から前門・石丸  
(1992年9月10日筆者撮影)

北米における日本移民，とりわけ沖縄移民の研究は断片的，個別的研究を除いて，組織的かつ総合的調査研究は比較的少ない。(2) 北米における沖縄移民の現地調査は学術的な意義をもつばかりでなく，地元沖縄県や北米各国の沖縄移民からの強い要請でもある。とりわけ，北米現地からは一世移民存命中の調査が切望され，早い時期の調査の実施が要請されている。(3) 国際交流の実践者である沖縄移民を通して，沖縄県人及び沖縄社会の特質が究明される。(4) 北米の戦前・戦後移民の実態調査により，沖縄移民の全体像を究明することができる。また，北米における沖縄移民は，日本移民研究の中で以下の特色にみられるような重要な地位を占めている。その特色は(1) 出移民数，海外在留者数，出移民率が大きいこと，(2) 初回移民は，他府県に遅れたにもかかわらず，短期間に多数の移民を送り出したこと，(3) 移民送金などによる県経済・社会への寄与が大であったこと，(4) 沖縄移民は北米の受け入れ国において定着率及び貢献度が高いこと，などがあげられる。この移民現象をとりあげ，その実態を明らかにすることは，日本移民の本質の究明に貢献しうると考える。

## 2. 研究計画の準備状況

北米の調査予定地には各国に沖縄県人会及び国際協力事業団事務所があり，調査にあたっては施設の提供と調査協力の体制ができています。また，現地の共同研究者は沖縄移民で，現地の実情に精通し，調査実施にあたってはより効果的な活動が可能である。また，沖縄移民は比較的集中居住するため調査地域も設定し易く，日程や調査人員の面からも本調査計画は妥当であると考えます。

本調査において、以下の現地諸団体機関との折衝ならびに調査協力の依頼を行うことが可能である。その結果、各調査国において円滑な本調査が実施できる体制が整っている。

1. アメリカ合衆国ハワイ州

①ハワイ沖縄県人連合会、②ハワイ日系人連協会

2. アメリカ合衆国カリフォルニア州及びカナダブリティッシュコロンビア州・アルバータ州

①北米沖縄県人会、②北カリフォルニア沖縄県人会、③カナダ沖縄県人連合会

3. メキシコ

①メキシコ沖縄県人会、②国際協力事業団メキシコ事務所

北米から一時帰国した沖縄移民に対しては面接調査を実施し、情報収集及び現地調査の状況把握につとめている。また、琉球大学在学中の海外移住子弟留学生（北米各国）からの聴取調査も行っている。

相手国の研究者との共同調査としては、以下の沖縄県出身移民や団体との研究協力が得られているし、予定している。

1. アメリカ合衆国ハワイ州

ハワイ沖縄県人会連合会長アイザック・外間氏、同会元会長東恩納良吉氏、ハワイ大学準教授崎原 貢氏を現地共同研究者として、調査全般にわたって研究協力が得られている。

2. アメリカ合衆国カリフォルニア州及びカナダブリティッシュコロンビア州・アルバータ州

北米沖縄県人会前会長金城武男氏、カナダ沖縄県人連合会元会長宮城 弘氏、カルガリー沖縄県人会元会長高那善正氏を現地共同研究者として、調査全般にわたって研究協力が得られている。

3. メキシコ・メキシコシティ

メキシコ沖縄県人会会長大兼久正康氏を現地共同研究者として、調査全般にわたって研究協力が得られている。

この研究計画に関する内外の状況は以下のとおりである。

北米における日本移民特に沖縄移民についての研究は、その歴史的な研究が若干行われてきた。例えば、アメリカ合衆国ハワイ州においては、“UCHINANCHU : A History of Okinawans in Hawaii” University of Hawaii,1981 やアメリカ合衆国カリフォルニア州においては『北米沖縄人史』（北米沖縄クラブ、1981）がそれである。しかし、日本移民史において移民数・移民率など重要な地位を占め、長い歴史を有し、典型的な「移民県」と称される沖縄県から出たアメリカ合衆国・カナダ・メキシコの沖縄移民について、このような

実態調査を主体とした地理学的研究は、国内・国外を問わずほとんどないのが実情である。

本研究の収集資料などの整理保管に関しては以下の通り実施する予定である。

現地において収集した沖縄移民関係資料はすべて琉球大学法文学部地理学教室で分類・整理した後保管し、展示および資料の利用に供する体制に置く。その管理責任者は琉球大学法文学部教授石川友紀（研究代表者）である。

研究期間中現地調査において、万一災害発生の場合の補償についての方策は以下の通りである。

本調査隊員は大学研究機関に所属しているので、万一の災害発生に関しては、公務出張中の災害として処理できる。さらに、研究代表者の責任において保険（生命保険及び傷害、疾病保険等）をかけるなど、万全の対策を立てて処理する。

### 3. 研究計画全体の概要

本研究は以下の4つの目標を持つ。(1) 移民地における自然環境及び社会環境への適応、(2) 移民地における職業選択及び定着の仕方、(3) 移民地における経済活動とその展開、(4) 移民地における集団形成及び文化の受容と変容

以上の4研究目標を踏まえ、北米における沖縄移民の位置づけを行い、また、北米社会において沖縄移民の果たした役割を他府県出身移民や他国移民などと比較検討することにより、沖縄移民の特殊性を解明し、もって日本移民の本質を明らかにしたい。

調査国は沖縄移民の多いアメリカ合衆国・カナダ・メキシコの3か国を対象とする。その結果、調査国が広範囲にわたるため、調査は3回以上にわたって実施する必要がある。

第1次調査においては、沖縄移民の歴史が長く、移民特性が南米移民と共通するアメリカ合衆国ハワイ州の一世及び二世の移民の実態調査を行う。第2次調査ではアメリカ合衆国カリフォルニア州とカナダのブリティッシュコロンビア州及びアルバータ州の沖縄移民の実態を調査する。第3次調査では、メキシコのメキシコシティの沖縄移民の実態調査を行う。

### 4. 研究の実施計画・方法

本研究は以下の4つの目標をもつ。(1) 移民地における自然環境及び社会環境への適応、(2) 移民地における職業選択及び定着の仕方、(3) 移民地における経済活動とその展開、(4) 移民地における集団形成及び文化の受容と変容。以上の4研究目標を達成するために、次のような調査を行う。

統括

- ①移民（移民地）の分布 ②移民過程 ③移民政策 ④移民問題

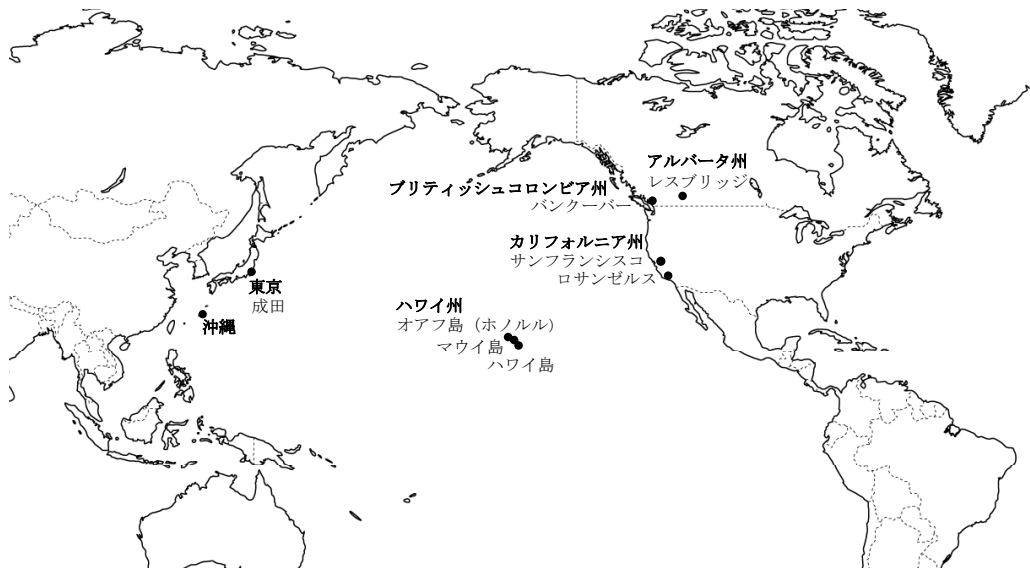


図1 調査地点

#### 自然環境及び環境への適応

- ①移民地の自然環境（地形，気候，水，その他の土地条件）
- ②適応の問題

#### 生業・職業の選択及び定着の仕方

- ①定着
- ②移動
- ③職業の類別
- ④職業の変遷

#### 経済活動とその展開

- ①財産形成
- ②資金の調達
- ③経営
- ④流通

#### 集団形成及び文化の受容と変容

- ①集団の形成と維持
- ②社会階層性
- ③生活様式
- ④言語

以上の調査によって，北米における沖縄移民の位置づけを行い，また，北米社会において沖縄移民の果たした役割を他府県出身の移民や他国移民などと比較検討することにより，沖縄移民の特殊性を解明し，もって日本移民の本質を明らかにしたい。

## 5. 研究調査の実施

研究の経過・実績は以下のとおりであった。調査地点を図1に示す。

1) 1992年（平成4）度アメリカ合衆国ハワイ州（9月10日～9月21日現地調査）

- ①ハワイ州において，一世移民を対象としてオアフ島81名，マウイ島30名，ハワイ島29名，計140名のアンケート調査を行い，当時の渡航状況や就業形態など地域的な特性が把握された。



写真2 ハワイオキナワセンター

オアフ島ホノルル市郊外，沖縄県系人の集会所，左側に事務所の建物もあり，資料収集を行った。  
(1992年9月14日筆者撮影)

- ②オアフ，マウイ，ハワイの各島におけるフィールド調査によって，沖縄県出身移民を取り巻く，自然，社会，経済的環境が理解でき，南米における状況との差異が認識された。
- ③沖縄県人会の組織及び運営状況を調査したことによって，ハワイにおける現在の沖縄県人社会の実態を解明することができた。

以上のような調査によって，ハワイにおける沖縄移民の全体像が把握でき，日本移民のなかでの沖縄移民の特質が理解できた。また，異文化のなかに現れる沖縄文化の特質がハワイ沖縄移民を通して把握された。さらに，先に行った南米移民調査における成果と比較することによって，両地域における沖縄県出身移民の実態の差異が明らかになった。

1992年度アメリカ合衆国ハワイ州における現地調査の反省を踏まえた課題は以下のとおりであった。

- ①10年ぶりのハリケーン襲来によって，カウアイ島の調査ができなかったため，ハワイ州における沖縄県出身移民の実態解明に際して一般化がやや困難になった。
- ②調査対象とした一世移民が高齢あるいは生存率が低くなっているため，アンケートの実施等に困難をきたした。その結果，回答内容における情報損失あるいは有意性の問題が発生した。
- ③ハワイ州各島におけるプランテーションを視察し，当時の社会・経済的状況について考察を行ったが，資料等によって深化する必要性が認められた。
- ④移民に関する資料の複写や入手を円滑に行うことができ，資料収集が精力的に実施できたが，十分でなかった。





写真3 ハワイ島ヒロ市病院での一世移民調査風景  
(1992年9月22日筆者撮影)

2) 1993年(平成5)度アメリカ合衆国カリフォルニア州、カナダブリティッシュコロンビア州とアルバータ州(9月10日～9月30日現地調査)

本研究は過去10年余にわたって実施してきた海外学術研究「南米における沖縄県出身移民に関する地理学的研究」に引きつづき、1992年(平成4)度はアメリカ合衆国ハワイ州における沖縄県出身一世移民の面接聞取調査とともに、移民資料収集を行ってきたことを踏まえて、1993年(平成5)度はアメリカ合衆国カリフォルニア州とカナダのブリティッシュコロンビア州とアルバータ州の沖縄県出身移民の調査研究を実施した。1993年9月10日から9月30日までの21日間の現地調査の結果、以下のことが判明した。

①アメリカ合衆国カリフォルニア州ロサンゼルスの沖縄県出身移民の調査においては、研究者5人が北米沖縄県人会の全面的な協力により、第二次世界大戦前渡航の一世移民(平均年齢90歳前後)を手分けして自宅を訪ね、また、集団で老人ホームを訪ねて、面接アンケート調査を実施した。その方々より当時の日本人移民が排日により偏見をもってみられたこともあったという証言が得られた。また、沖縄県出身移民は地縁血縁によりよく団結し、親睦と資本形成をかねた頼母子講(模合)を開いていたという。なかでも、移民在留者数の多かった金武村出身者の団体は強固で、村人会組織のトップに位置していた。日本人の農業移民の原点といわれるインペリアルバレー(帝国平原)の日系移民地を調査し、その過酷な自然条件を克服しての農業生産の実態に接し、移民史料館建設など三世移民による一世移民の評価の時機に至っていることを痛感した。



写真4 オアフ島ホノルル市における沖縄県系移民の集まり  
(1992年9月26日筆者撮影)

- ②アメリカ合衆国カリフォルニア州サンフランシスコおよびサクラメントなどの沖縄県出身移民の調査においては、北カリフォルニア沖縄県人会の方々の協力により、第二次世界大戦前渡航の一世移民とともに、戦後渡航の一世や帰米二世の面接聞取調査も実施した。なかでも、戦後アメリカ人の花嫁移民として渡った沖縄県出身女性のたくましさとバイタリティーには目を見張るものがあり、移民女性史として取り上げるべき意義を感じた。
- ③カナダアルバータ州レスブリッジの沖縄県出身移民の調査においては、レスブリッジ沖縄クラブの全面的な協力により、炭鉱労働者や農業労働者としてのカナダにおける日本人移民発祥の地の現地調査をおこなった。亜熱帯沖縄県の自然条件としては全く異なる寒冷地にあつて、県出身移民が第二次世界大戦前より、ハーディービルなどの炭鉱地の労働者として日本人移民の基礎を築いたことは高く評価される。沖縄県の移民の民間大使の一人が空手道場をもち、カナダ人との国際交流を果たしている役割も大きかった。
- ④カナダ・ブリティッシュコロンビア州の沖縄県出身移民の調査においては、沖縄県友愛会（バンクーバ沖縄県人会）の方々の協力により、バンクーバ市およびその郊外の一世移民の面接聞取調査を実施し、また、旧日本人街や中国人街の踏査もおこなった。バンクーバ市やその郊外では第二次世界大戦後渡航の一世移民の活躍が目覚ましく、農業移民や工業移民など資本をもつての会社ぐるみの集団移住などもみられ、また、庭師などの職業もみられ、現地社会での貢献も大であることが判明した。

以上のように、1992年度のアメリカ合衆国ハワイ州における沖縄県出身移民が数量的にも多く、比較的集中して居住し、現地調査も効果的におこない得たのに対し、1993年度の調査は北アメリカ大陸西海岸地域の広範囲にわたり、県出身移民の居住地も分散していることが多く、現地調査に多くの労力と時間を要した。しかし、いずれの調査地においても、沖縄県人会の全面的なバックアップがあり、残り少なくなった県出身一世移民と帰米二世の面接聞取調査と資料収集を中心とした海外学術研究を行うことができた。現地協力者の方々には厚くお礼を申し上げたい。

従来実施してきた沖縄県出身移民の南アメリカにおける地理学的研究の成果のうえに、北アメリカにおける本調査の成果は、今後時間をかけて分析、考察を行うつもりである。このことにより、北米における沖縄県出身移民の特色が地理学的に解明され、もって日本移民の本質の究明につながるものと考えられる。

### Ⅲ. ハワイ一世移民の現地調査事例

以下、1992年（平成4）9月アメリカ合衆国ハワイ州において、「北米における沖縄県出身移民に関する地理学的研究」を実施した際、個人面接調査票を使用し、一世移民の証言を面接聞取調査により記録したものである。この証言は本人の語った言葉をできるだけ忠実に再現した。（）内は裏付け資料として筆者により補足追記した部分である。

#### (1) 宮城春子

1905年（明治38）7月6日生。オアフ島ホノルル市で1992年9月12日に面接聞取調査。調査時現在87歳、宜野湾村字嘉数492番地出身。父知花加那・母カメの長女。夫宮城幸盛。宜野湾尋常高等小学校を卒業後、家業の農業を手伝うと同時に、パーキ（ざる）作りの竹細工の仕事もしていた。

1922年（大正11）3月16歳8か月で、すでにハワイへ渡航していた夫となる宮城幸盛（1903年生で親戚）の呼び寄せで、単身ホノルル市へ渡航した。写真結婚で父親同士の了解が得られていた。夫のハワイ渡航も父親の呼び寄せによるもので、ホノルル市でクック（料理人）として働いていた。

渡航後、最初の住居はホノルル市のククイストリートであった。ついでリリハストリート、カハルーへと移転し、マッカレーには40年余も住んでいた。現在地のカパフルのフランシスストリート3355は1976年以降住み続けている。ハワイ移民した当時から永住の決意があり、1975年にアメリカ国籍を取得した。兄弟姉妹は男性が4人、女性が3人で計7人である。子供は男性が3人、女性が3人で計6人である。孫は21人、ひ孫は17人である。同居家族は5人。家屋・宅地は自己所有で、仏壇・墓地もある。宗教は仏教である。家庭での言語は夫婦は沖縄方言、親子や家族全体では日本語を使用する。沖縄料理をよく

作り、トーフ・ウンブサー、ナントウが好きである。

情報入手手段としての邦字新聞（日本語新聞）は『日布時事』『ハワイ報知』を購読している。ラジオ・テレビ・雑誌もすべて日本語で情報を得ている。宜野湾市人会の会員である。

模合（頼母子購）は月1回2か所（一口100ドルと50ドル）に参加し、会員同士親睦を深めている。銀行は利用していない。戦前郷里へ送金したことがある。戦後沖縄へ救援物資を送った。

郷里への一時帰国（再渡航）は、戦前はなく、戦後1958年35年ぶりに、船で初めて帰った。その後1969・73・75・77・79・83・85・86・89・91と合計11回帰国した。

## (2) 伊波ウサー

1903年（明治36）3月15日生。オアフ島ホノルル市で1992年9月12日面接聞取調査。調査時現在89歳。宜野湾村字嘉数27番地出身。父伊波加那・母カメの2女。夫伊波加那は6歳年上。宜野湾高等小学校を卒業し、同高等科を中退す。卒業後、家業の農業を手伝っていた。

1920年（大正9）17歳の時、すでにハワイへ移民していた父に、母・弟とともに呼び寄せられた。ハワイへの渡航はペルシア丸（号）で横浜から出航した。

渡航後、ハワイでは父がサトウキビプランテーションで働いていたので、オアフ島のアイエア耕地で家族が合流した。1年半後に伊波加那と結婚し、ホノルル市のマノアに住んでいた。夫の仕事はタクシーの運転手であった。その後、フォード自動車会社のメカニクガレージグースに職場が変わり、その整備工場で40年余働いていた。永住を決意したのは戦後で、現在日本国籍のままである。永住権のグリーンカードを最初取得したときに70ドルを支払った。

兄弟姉妹は男性が1人、女性が2人で計3人である。子供は男性のみの5人である。孫は5人、ひ孫は7人である。同居家族は2人。家屋・宅地は自己所有で、仏壇・墓地もある。宗教は仏教である。家庭での言語は夫婦はウチナーグチ（沖縄方言）で話し、親子は日本語で、家族全体では沖縄方言と日本語を併用している。沖縄料理を作って食べるが、好きなものは豚肉やチャンプルーで、コンブもよく使う。

邦字新聞は『ハワイ報知』『ハワイパシフィックプレス』を購読し、日本語によるテレビをみ、婦人雑誌を読んでいる。同郷人団体としては宜野湾市人会・宜野湾婦人会に所属する。また、ハワイの東本願寺とパロロのシニアセンターの2つの老人クラブの会員でもある。

模合は友人と親睦のため、月1回一口30ドルに参加している。現地の銀行は利用していない。戦後沖縄へ戦災救援物資を送ったことがある。

郷里への一時帰国は、戦後1956年に35年ぶりに墓参りと親戚訪問を兼ねて以来、約10回もある。

### (3) 伊渡村千代

1904年(明治37)2月28日生。オアフ島ホノルル市で1992年9月12日面接聞取調査。調査時現在88歳。首里市中大町出身。父新垣義秀・母ゴゼイの5女。夫は伊渡村正為で首里市崎山町生まれ。首里尋常高等小学校女子部を卒業した。その後、家内工業のパナマ帽(子)あみの仕事にも従事した。一日一円の賃金であった。

1923年(大正12年)2月10日19歳のとき、夫の呼び寄せでハワイへ渡航した(外務省の「海外旅券下付表」によると、伊渡村千代は中頭郡宜野湾村字宜野湾1,121番地に本籍のある戸主伊渡村正昭二男正為の妻として、夫の呼び寄せで布哇(ハワイ)へと渡航し、旅券の下付年月日は大正12年2月2日となっている<sup>5)</sup>)。神戸港をサイベリア号で出航し、10日後ホノルル港についた。旅費は自己負担であった。

渡航後、ハワイで約50年間もホノルル市のパワーストリートに住み。ヤングホテルの従業員として働いた。また、その間約10年はハワイ島のオーラー耕地へ移り、サトウキビ耕地で働いた。その後オアフ島ホノルル市に戻り、マニキア、カイクキにも住んだことがあり、現在19アベニューに住み、隠居の身分である。日本国籍のままであるが、移民当時から永住するつもりであった。兄弟姉妹は男性が3人、女性が6人で計9人である。子供は男性が3人、女性が4人で計7人である。孫は12人である。同居家族は2人。家屋・宅地は自己所有で、仏壇・墓地もある。不動産として土地や建物がある。宗教は仏教で慈光園の信徒である。家庭での言語は夫婦は沖縄方言を話し、親子や家族全体では日本語を使用する。沖縄料理はよく作り、アシテビチ・ゴーヤー・ナーベラー(へちま)が好きで、ジュシーも作る。

邦字新聞は購読せず、情報源はラジオ・テレビで日本語によるものである。同郷人団体としては、宜野湾市人会・首里クラブ・首里婦人会に所属し、日本人全体のクラブであるラナキラにも入会している。

模合もかつて参加したことがある。郷里への送金は戦前行ったことはあるが、戦後はない。一時帰国は戦前1932年初回で、戦後も併せ合計10回もある。

### (4) 上原亀三郎

1905年(明治38)2月15日生。オアフ島ホノルル市で1992年9月13日面接聞取調査。調査時現在87歳。糸満市字糸満1,990番地出身。父上原牛・母みさの3男。妻鶴子は、大正2年生。糸満尋常高等小学校を卒業した。6年制で13歳で卒業し、1年半ほど郷里ですごした。漁師と農業の経験がある。



写真5 上原亀三郎氏（明治38年生、糸満市出身）写真左から2番目と奥様  
（1992年9月13日筆者撮影）

1919年（大正8）10月14日14歳のとき、父の呼び寄せで単身ハワイのホノルル港に着いた（外務省の「海外旅券下付表」によると、上原亀三郎は島尻郡糸満町1,990番地に本籍のある戸主上原 牛の三男として、父の呼び寄せでハワイへ14歳7か月で渡航し、旅券の下付年月日は大正8年9月30日となっている<sup>6)</sup>）。横浜港を日本郵船の天洋丸で出航し、ホノルル港へ到着し、上里旅館に宿泊した。到着時ホノルルでは移民局で目と12指腸の検査のため、2、3日留めおかれた。親が迎えに来てくれた。

渡航後、マウイ島のパイヤプランテーションへ行き、サトウキビ耕地で働いた。その後カイルア耕地へ移った。同耕地では木造の一軒家が割り当てられ、2部屋とキッチンがあった。食事は米食で、魚も肉もあった。沖縄でのイモ中心の食事よりはるかに恵まれていた。

1943年オアフ島のホノルル市モイリリーに移り、約7年間レストランを経営した。1950年以降ホノルル市のアラマハモエストリート1,470で、42年間もアロハ豆腐製造所を創設し経営している。現在、「アロハトーフ」として名が売れ、経営を子供たちにまかせ、従業員も18人雇い発展している。

一世なので日本国籍のままである。アメリカに帰化していない。選挙権がない以外は何ら不自由をしていない。移民当時永住の決意はなかったが、子供が出生して以後永住の意志に変わった。

兄弟姉妹は男性が3人、女性が2人で計5人である。子供は男性が4人、女性が2人で計6人である。孫は12人である。家屋・宅地は自己所有で不動産として土地を2か所もっている。仏壇はないが、墓地はある。宗教は仏教で、西本願寺系の玉代勢法雲開教師の経営する慈光園の信徒である。家庭での言語は夫婦・親子・家族すべて日本語を使用している。

邦字新聞は『ハワイ報知』『ハワイパシフィックプレス』を購読し、ラジオ・テレビ・雑誌もすべて日本語の媒体によるものである。所属団体は糸満クラブで、趣味は旅行である。

模合は資金調達のため、月1回一口100ドルのに参加している。郷里への送金は戦前に行ったことがある。終戦直後、郷里へ救援物資を送ったことはない。一時帰国は戦前1928年9年ぶりと、戦後1963年・91年など計6回ある。

#### (5) 平良賀真

1903年(明治36)11月25日生。オアフ島ホノルル市で1992年9月13日面接聞取調査。調査時現在88歳。美里村字石川574番地出身。父平良加那・母カメの長男。妻ツルは明治40年生。伊波尋常高等小学校を卒業し、補習科2年を修了した。父の職業は農業で、畑でサトウキビを、水田で米を作っていた。家屋は茅葺き造りであった。

1919年(大正8)12月25日15歳のとき、単身で父の呼び寄せでハワイへ渡航した(外務省の「海外旅券下付表」によると、平良賀真は中頭郡美里村字石川574番地に本籍のある戸主平良加那長男として、父の呼び寄せで16歳1か月でハワイへ渡航し、旅券の下付年月日は大正8年12月9日となっている<sup>7)</sup>)。渡航のルートは那覇・鹿児島間は船、鹿児島・神戸・横浜間は汽車で行き、横浜港をコリアン丸(号)で出航し、8日目にホノルル港に着いた。

渡航後、父の職場があったカウアイ島のカパーのサトウキビ耕地へ行き、ケアリア砂糖会社で約3年間働いた。サトウキビ耕地ではワーラーボーイという耕地に水を配給する仕事に従事した。朝7時には弁当をもって耕地へ向かった。給料は月30ドルであった。

1923年オアフ島へ移り、ホノルル市ケカウ街でレストランの皿洗いの仕事をした。翌1924年ホノルル市シティーカフェで約4年間コックとして働いた。1928年以降は同地で牛飼いととしての牧場経営や牛乳業に従事した。現在はアイエアハイツ・ドライブ991012に住んでいる。

1956年アメリカ国籍を取得し、選挙権も得られた。帰化市民のための学校にも通った。永住の意志は移民した当時はなく、子供の成長により、太平洋戦争終了後に決意した。

兄弟姉妹は男性が4人、女性が1人で計5人である。子供は男性が1人、女性が5人で計6人である。孫は13人、ひ孫は12人である。現在同居家族は3人。家屋・宅地は自己所有である。仏壇はないが、墓地はホノルル市郊外のカネオヘにある。宗教はキリスト教でプロテスタントである。家庭での言語は夫婦は沖縄方言を話し、親子・家族は日本語と英語を併用している。沖縄料理をよく作り、ウムクジチャンプルーが好きである。コックの経験があるので、脂をとらず、イリコを使用し、健康に気をつけている。

邦字新聞は『ハワイ報知』『ハワイパシフィックプレス』を購読し、英語新聞の『スター

ブリテン』もよく読む。日本語・英語のラジオ・テレビも情報源としている。同郷人団体は石川市人会に所属する。

模合はかつて資金作りのため、参加したことがある。現地の銀行は利用していない。郷里への送金は戦前行ったことはあるが、戦後はない。沖縄へ戦後救援物資として、米・缶詰類・薬品・豚・山羊を送った。郷里への一時帰国は戦前1938年に初回で、戦後を含めると6回ある。

#### (6) 石川 松

1894年（明治27）7月5日生。オアフ島ホノルル市で1992年9月13日面接聞取調査。調査時現在98歳。美里村字石川出身。父石川 亀・母カマの息子。伊江尋常高等小学校を卒業。卒業後、家業の農業の手伝いをしていた。当時はコメ・サトウキビを作っていた。

1910年（明治43）10月16歳の時、父の呼び寄せでハワイへ渡航した（外務省の「海外旅券下付表」によると、石川 松は中頭郡美里村字石川670番地に本籍のある戸主石川亀の○子男として、父の呼び寄せで16歳3ヶ月でハワイへ渡航し、旅券の下付年月日は明治43年10月22日となっている<sup>8)</sup>）。神戸港から日本丸でハワイへ向かった記憶がある。

渡航後、カウアイ島ケカハ耕地の父のもとで、サトウキビ耕地のキビの刈り取りや運搬の仕事をした。その後、柳行李ひとつをもってハワイ島へ渡った。同島の耕地で朝早くから弁当を持ち、一日中働いた。再びカウアイ島へも戻ったが、1930年ごろからオアフ島のホノルル市に移り住んだ。

ホノルル市ではエアポート近くで約20年間養鶏業の仕事をした。鶏を最高2,500羽まで飼育した。その後、ダイヤモンドトラックで土地を借り農業をした。日本国籍のままである。移民当初は出稼ぎのつもりであった。

家庭は25歳のときに結婚したが、写真による見合いであった。子供は男性が2人、女性が4人で計6人である。孫は9人、ひ孫は7人である。家屋・宅地は借りている。仏壇はないが、墓地はホノルル市のヌアヌ地区にある。宗教はキリスト教である。家庭での言語は夫婦は沖縄方言で話し、親子や家族全体は日本語と英語を併用する。現在老人病院に1人である。

邦字新聞は『ハワイ報知』を購読し、ラジオは日本語の番組をきいている。同郷人団体は石川市人会に所属する。郷里への送金はしたことがない。一時帰国は戦前1940年46歳の時と、戦後88歳の時で計2回ある。

#### (7) 石川盛永

1905年（明治38）3月2日生。オアフ島ホノルル市で1992年9月14日に面接聞取調査。調査時現在87歳。美里村字石川622番地。父石川 亀・母マツの2男。妻キクエは大



正15年生で帰米二世である。伊波尋常高等小学校を卒業した。卒業後、家業の農業の手伝いをした。コメ・サトウキビ・サツマイモを栽培していた。

1920年(大正9)15歳のとき、父の呼び寄せで単身サイベリア号でハワイへ渡航した(外務省の「海外旅券下付表」によると、石川盛永は中頭郡美里村字石川622番地に本籍のある戸主石川 亀の二男として、父の呼び寄せで15歳3か月でハワイへ渡航し、旅券の下付年月日は大正9年6月8日となっている<sup>9)</sup>)。神戸で移民の宿泊所があり、目の検査をうけた。

渡航後、父が住むカウアイ島カパアのケアリア耕地で、2年間サトウキビ畑で働いた。キビの刈り取り(カチケン)や運搬(ハッピーコウ)の仕事をした。1922年オアフ島へ渡り、ホノルル市で2か月間ヤードボーイの仕事をした。また、6か月間牧場で乳しぼりの仕事もした。

1924年19歳以後ホノルル市ヌメアで、牛乳屋を経営し60余年もつづけた。太平洋戦争中も仕事を継続することができた。移民当時から永住の決意はあった。日本国籍のままである。

兄弟姉妹は男性のみ2人で、4歳年上の石川盛福は91歳で、オアフ島のカネオヘにおいて健在である。子供は男性が2人、女性が2人で計4人である。孫は2人いる。家屋・宅地は自己所有で、仏壇や墓地もある。宗教は仏教である。家庭での言語は夫婦・親子・家族とも日本語を使用している。同居家族は2人。沖縄料理をよく作り、ゴーヤー・トウガン・ジュシーメーが好きである。

邦字新聞は購読してない。日本語のラジオをきき、テレビをみる。同郷人団体は石川市人会に所属し、かつては地元ラカナの会員でもあった。模合は一口100ドルのに参加している。参加者が10何人もいるので、終了までに1年半もかかる。銀行は利用してない。郷里への送金は戦前に行ったことはあるが、戦後はない。一時帰国は戦後1950年45年ぶりと1986年の計2回ある。

#### (8) 上原タケ

1904年(明治33)2月15日生。オアフ島ホノルル市で1992年9月14日に面接聞取調査。調査時現在88歳。小禄村字具志出身。父上原 亀・母カメの長女。夫は同字出身の上原幸永である。尋常小学校には女性という理由で入学させてもらえなかった。実家は百姓で茅葺きの住居であった。畑があり、サトウキビとサツマイモを作って生計を立てていた。帽子あみの仕事もした。

1924年(大正13)5月上原幸永と結婚して20歳のときハワイへ渡航した(外務省の「海外旅券下付表」によると、上原タケは島尻郡小禄村字具志159番地に本籍のある戸主上原幸永の妻として、19歳3か月で夫と同行(夫は再渡航)でハワイへ渡航し、旅券の下付年月日は大正13年5月1日となっている<sup>10)</sup>)。夫と2人で横浜港から日本の船で出航し、11日間でホノルル港に着いた。

渡航後、ハワイ島ヒロ市山手のケンプトー2番ワイケアのサトウキビ耕地で働いた。7年後同島ケンプトー4番のフォキ耕地へ移り、30年間もサトウキビプランテーションで働いた。

戦後1960年オアフ島へ渡り、ホノルル市カイムキ12番街に住み、9年間前と同様サトウキビ耕地の仕事をした。当時、午前5時30分朝食後に汽車でキビ耕地へ向かった。午後4時まで畑で仕事をして、賃金は一日1ドルであった。

1970年ごろからホノルル市マカレーに移り住んだ。1974年以後長女の家族と一緒に住んでいる。移民当時は出稼ぎのつもりであったが、子供ができてから永住を決意した。一世なので日本国籍のままである。

兄弟姉妹は男性が3人、女性が4人で計7人である。子供は男性が3人、女性が2人で計5人である。孫は7人、ひ孫は2人である。家屋は自己所有であるが、宅地は借用している。仏壇はあり、墓地はホノルル市郊外のカネオへにある。宗教は仏教で、浄土宗の信徒である。家庭での言語は夫婦は沖縄方言で話し、親子・家族は日本語を使用する。沖縄料理はよく作り、トーフチャンプルー・ゴーヤー・ナーベラーが大好きで、コンブ・ダイコンもよく使用する。

邦字新聞は購読していない。情報はすべてラジオやテレビの日本語で得る。同郷人団体としては字小緑の小緑同志会に所属する。ホノルル市にあるシニアシティズンクラブの会員でもある。

模合は兄弟姉妹を中心に10人で、親睦のために行っている。月一回一口50ドルである。郷里への送金は戦後父が85歳の生年祝いのときに行った。戦後沖縄へ戦災救援物資を送った。郷里への一時帰国は1954年・76・87・91年で計4回ある。

#### (9) 呉屋カメ

1903年（明治36）1月12日生。オアフ島ホノルル市で1992年9月15日面接聞取調査。調査時現在89歳。西原村字小那覇出身。父玉那覇正英・母マカトの長女。夫は呉屋嘉真。西原尋常高等小学校を卒業した。

1921年（大正10）12月19歳のとき、父の呼び寄せで弟玉那覇正吉（正英の長男、16歳4か月）と2人でハワイへ渡航した（外務省の「海外旅券下付表」によると、玉那覇カミ（カメの方言名か）は中頭郡西原村字小那覇32番地に本籍のある戸主玉那覇正英の長女として、父の呼び寄せで19歳でハワイへ渡航し、旅券の下付年月は大正10年12月4日となっている<sup>11)</sup>）。オアフ島ホノルル港までの輸送船は大型の天洋丸であった。乗船客は再渡航者や呼び寄せの女性（妻など）や子供が多かった。

渡航後、マウイ島パイヤ耕地近くのカエカエキャンプで、父と弟の3人でサトウキビ畑で働いた。一日8時間労働で男性は1ドル、女性は75セントの賃金であった。翌1922年呉屋嘉真と結婚し、父と別れて同島ケアフキャンプのサトウキビ耕地で働いた。その後同

島のカイカー耕地へ移った。

1930年マウイ島クラ耕地へ移動し、パイナップル耕地の缶詰工場で働いた。1936年ごろオアフ島ハレイワのビショップ博物館近くのフラセキャンプで、野菜作りに転じた。その後、同島同地のサトウキビ耕地で働いた。1941年ごろオアフ島ハレイワパラールで、魚屋を経営し、1966年ごろまで現役で働いた。移民当時は3年間の出稼ぎのつもりであったが、戦後永住の決意をした。1981年アメリカ国籍を取得した。

兄弟姉妹は男性が1人、女性が2人で計3人である。子供は男性が1人、女性が6人で計7人である。孫は22人、ひ孫は27人である。現在1人住まいである。家屋・宅地は自己所有で、仏壇があり、墓地はホノルル市のヌアヌ地区にある。宗教は仏教である。家庭での言語は夫婦は沖縄方言で話し、親子・家族は日本語を使用する。沖縄料理はアシテビチ・ゴーヤー・トーフが好きである。

邦字新聞は購読していない。ラジオもテレビも日本語の場合のみ、きいたりみたりする。同郷人団体は沖縄県人連合会、西原村人会に所属する。

模合はかつて参加した。親睦のためで、10人で一口20ドルで1年間のものと、家族中心の8人による一口50ドルの模合が毎月あった。銀行も利用している。郷里への一時帰国は戦後1953年・63年の計2回ある。

#### (10) 伊芸英太郎

1904(明治37)12月16日生。オアフ島ホノルル市郊外ワイアワで1992年9月15日に面接聞取調査。調査時現在87歳。金武村字金武174番地出身。父伊芸孝吉・母カマの長男。妻ウトは明治40年2月6日生。金武尋常高等小学校を卒業し、高等科2年で中退した。その後、首里の県立師範学校の敷地内にあった県立工業学校に通った。

1923年(大正12)3月19歳のとき、父の呼び寄せで単身ハワイへ渡航した(外務省の「海外旅券下付表」によると、伊芸英太郎は国頭郡金武村字金武174番地に本籍のある戸主伊芸八太郎孫として、父の呼び寄せで18歳4か月でハワイへ渡航し、旅券の下付年月日は大正12年3月15日となっている<sup>12)</sup>)。那覇港を船で出航、鹿児島へ着き、汽車で神戸まで行った。郷里を出発してから1週間はかかった。目や十二指腸の検査をして、横浜港から日本郵船の天洋丸でハワイへ渡航した。ホノルル港に着くまで7、8日間かかった。

渡航後、1923年から3年間オアフ島パールシティのフルーツカンパニーのパイナップル会社で大工の仕事をした。1926年同島のワイヤブへ移り、コックの仕事をした。同地で1933年から10年間父と2人で土地をリースして、パイナップルや野菜・ダイコン・サツマイモなどを栽培した。1941年以降太平洋戦争中もオアフ島スコーフフィールでパイナップルを作っていた。その後同島ワイピオで大工として、50軒の家屋を作った。

1965年以降ホノルル市で大工の仕事をしていたが、1970年65歳のとき現役を退いた。

移民当時は永住するつもりはなく、20歳から35歳まで、郷里へ徴兵検査の猶予願いをだし続けた。1975年ごろアメリカ国籍を取得した。

兄弟姉妹は男性が3人、女性が1人で計4人である。子供は男性が2人、女性が6人で計8人である。孫は15人、ひ孫は6人である。同居家族は2人。家屋・宅地は自己所有である。仏壇はあり、墓地もヌアヌ地区にある。家庭での言語は夫婦は沖縄方言と日本語を併用し、親子・家族は日本語を使用する。沖縄料理は豚肉・ゴーヤー・トーフが好きで、カンダバージュシーを気に入っている。

邦字新聞は『ハワイ報知』『ハワイパシフィックプレス』を購読している。ラジオはきかず、テレビは日本語の場合のみみている。日系人団体は金武町人会とワイアワ日本人会に所属している。趣味は彫刻作りである。

模合は月1回一口40ドルのものに参加している。銀行は利用していない。送金は戦前・戦後とも行ったことがある。郷里への一時帰国は戦前1933年10年ぶりに、戦後1953年・56年・70年・75年で計5回ある。

#### (11) 安慶名カミ

1904年(明治37)11月15日生。オアフ島ホノルル市郊外ワイアワで1992年9月15日面接聞取調査。調査時現在87歳。金武村字金武出身。父与那嶺徳吉・母ナベの長女。夫は具志川村(現うるま市具志川)出身の安慶名次郎。金武尋常高等小学校を5年生で中退した。その後家業の農業を手伝い、祖父母と共にサトウキビ作りをしていた。

1923年(大正12)4月19歳のとき、すでにサトウキビ耕地で働いていた父の呼び寄せで単身ハワイへ渡航した(外務省の「海外旅券下付表」によると、旧姓与那嶺カミは国頭郡金武村字金武297番地に本籍のある戸主与那嶺重蔵弟徳吉の長女として、父の呼び寄せで18歳5か月でハワイへ渡航し、旅券の下付年月日は大正12年3月30日となっている<sup>13)</sup>)。ハワイへ前記(10)の伊芸英太郎と同航で渡航する予定であったが、神戸の身体検査で12指腸虫症として不合格となり、その後治療してコレア号でホノルル港に着いた。

1923年渡航後3年間オアフ島カフク耕地パイナップル畑で働いた。賃金は1時間10セントであった。1926年同島マルカハナ・カベラで約5年間パイナップル耕地で夫とともに働いた。賃金は女性が一日1ドルで、男性はそれより高かった。

1931年ごろオアフ島ポムホ耕地に移り、以前と同様パイナップル畑で働いた。朝4時に起き朝食をすませ、午前6時に畑に向かった。午前11時に持参した弁当で昼食をとった。午後4時に仕事が終わり畑から帰宿した。1942年頃からオアフ島ワイアワへ移り住み、現在に至っている。移民当時は父母がハワイにいたので永住の決意であった。1982年ごろアメリカ国籍を取得した。

兄弟姉妹は男性が3人、女性が3人で計6人である。子供は男性が4人、女性が4人で

計8人である。孫は19人、ひ孫は5人である。家屋・宅地は自己所有である。不動産として貸家1軒をもっている。仏壇も墓地もある。家庭での言語は夫婦・親子・家族全員が日本語を使用している。宗教は郷里金武村の寺と同系列の真言宗で仏教である。沖縄料理はよく作り、チャンプルーとカンダバージュシーが好きである。

邦字新聞は購読してない。日本語によるラジオをきき、テレビをみる。同郷人の団体としてはワイアワの沖縄県系人のクラブに所属している。

場合はかつて参加したことはある。銀行は利用していない。郷里への送金は戦前は行っていたが、戦後はない。終戦後沖縄へ戦災救援物資を送った。郷里への一時帰国は戦後1961年・75年を含めて計4回ある。

## (12) 崎原盛賀

1904年(明治37)6月6日生。オアフ島ホノルル市で1992年9月16日面接聞取調査。調査時現在88歳。西原村字掛保久(崎原ヤードイ)出身。父崎原盛喜・母カマドの長男。妻百合子は首里崎山町3丁目出身、明治39年8月19日生である。西原尋常高等小学校を5年で中退す。父がハワイ移民であったので、母と2人留守をまもっていた。

1918年(大正7)14歳のとき、父の呼び寄せで母と2人ハワイへ渡航した(外務省の「海外旅券下付表」によると、崎原盛賀は中頭郡西原村字掛保久65番地に本籍のある崎原盛喜の長男として、父の呼び寄せで母カマト(34歳8か月)とともに、14歳でハワイへ渡航し、旅券の下付年月日は大正7年6月29日となっている<sup>14)</sup>)。身体検査などの都合で横浜では1か月も「今泉旅館」に宿泊させられた。渡航後約1年間、父が働いていたオアフ島のワイアワ耕地のNo.7キャンプのパイナップル畑で働いた。当時子供であったので、ウォーター・ボーイといってパイナップルの水かけの仕事をさせられた。その後、同島ワイパフ耕地やワイピオ耕地のサトウキビ畑で働いた。

1920年16歳のとき、オアフ島ヘイアに移り、6年間パイナップル耕地の労働に従事した。1924年20歳のとき、ポール(パール)シティーで約7年間パイナップル耕地で働いた。

1941年オアフ島アイエア耕地の上で、20エーカーの土地を借り、家族でパイナップル栽培をしたが、太平洋戦争が勃発して失敗に帰した。その後ホノルル市に移り住み、29年間ヤードボーイ(家庭奉公人)の仕事をした。1962年ごろオアフ島アイナハウへ住居をかまえて現在に至っている。子供も成長したので、終戦後永住を決意した。一世で日本国籍のままである。

兄弟姉妹はなく、一人っ子である。子供は男性が2人、女性が2人で計4人である。孫は12人である。家屋・宅地は自己所有である。仏壇はあり、墓地もホノルル市モイリリ地区にある。宗教は沖縄独特の祖先崇拜である。家庭での言語は夫婦は沖縄方言で話し、親子・家族は日本語を使用する。沖縄料理をよく作り、トーフ・パパイヤ・モヤシ・オーファ(野菜)ウブサーが好きである。



写真6 崎原盛賀氏（明治37年生，西原町出身）と戦前沖縄から持参した名器の三味線  
（1992年9月16日筆者撮影）

邦字新聞は『パシフィックプレス』を購読している。日本語のラジオをきき，テレビをみる。同郷人団体は西原町人会と首里クラブに所属する。趣味は三味線で野村流古典音楽保存会の会員である。アイエアに15人で三味線の崎原クラブを結成している。沖縄からもってきた名器の三味線も所有している。

模合は月1回一口50ドルで上記の崎原グループの15人のメンバーで行っている。郷里への送金は戦前も戦後も行った。戦後沖縄へ戦災救援物資として，金をだして食料・衣類・乳山羊・豚などを送った。郷里への一時帰国は1992年の2月を含めて計5回ある。

## 注

- 1) 拙著（1997）『日本移民の地理学的研究』榕樹書林，pp.53-90を参照。
- 2) 拙稿（2012）「新聞記事にみる明治期沖縄県における移民事象」『南島文化』第34号 pp.169-187。同（2012）「新聞記事にみる大正期沖縄県における移民事象」『移民研究』第8号，pp.57-79。同（2012）「新聞記事にみる昭和戦前期沖縄県における移民事象」『沖縄地理』第12号，pp.57-67。同（2013）「大正後期新聞記事にみる沖縄県の移民事象－植物標本より得られた近代沖縄の新聞から得られた新知見－」『沖縄文化』第47巻1号，pp.59-75。同（2013）「明治期沖縄県出身移民からの送金の実態」『沖縄地理』第13号，pp.75-78。
- 3) 1978年に予備調査より開始した「南米における沖縄県出身移民に関する地理学的研究」プロジェクトでは，琉球大学法文学部地理学教室により，以下のような3冊の報告書

と28篇の個人の研究論文等が公刊された。①『南米における沖縄県出身移民に関する地理学的研究－文部省科学研究費海外学術調査・昭和55年度調査総括－』（課題番号504342, 1981年刊）、②『南米における沖縄県出身移民に関する地理学的研究（Ⅱ）－ボリビア・ブラジル－文部省科学研究費海外学術調査・昭和60年度調査総括－』（課題番号60043053, 1986年刊）、③『南米における沖縄県出身移民に関する地理学的研究（Ⅲ）－アルゼンチン・ペルー－昭和63年度文部省科学研究費海外学術調査－』（課題番号63041107, 1990年刊）。なお、内容の詳細は拙稿（2003）「南米における沖縄県出身移民に関する地理学的研究－一世の地域的分布と職業構成を中心に－」『歴史地理学』第45巻1号, pp.72-85を参照。

- 4) 石川友紀編著（2004）『旧南洋群島における沖縄県出身移民に関する歴史地理学的研究 平成12～15年度科学研究費補助金。基礎研究B(2)研究成果報告書, 琉球大学法文学部。
- 5) 資料の出所は沖縄県公文書館史料編集室（2005）『沖縄県史』資料編19・近代6, 自由移民名簿・自1921（大正10）年至1925（大正14）年, p.130である。
- 6) 資料の出所は沖縄県公文書館史料編集室（1999）『沖縄県史』資料編8・近代2, 自由移民名簿・自1908（明治41）年至1920（大正9）年, p.667である。
- 7) 資料の出所は前掲注6)と同じ, p.687である。
- 8) 資料の出所は前掲注6)と同じ, p.59である。
- 9) 資料の出所は前掲注6)と同じ, p.721である。
- 10) 資料の出所は前掲注5)と同じ, p.223である。
- 11) 資料の出所は前掲注5)と同じ, p.61である。
- 12) 資料の出所は前掲注5)と同じ, p.134である。
- 13) 資料の出所は前掲注5)と同じ, p.133である。
- 14) 資料の出所は前掲注6)と同じ, p.569である。

(いしかわ ともりのり・琉球大学名誉教授・人文地理学)

## **Geographical Research on the Okinawan Immigrants in the North America I**

**Tomonori ISHIKAWA**

Professor Emeritus, University of the Ryukyus

(Human Geography)

**Keywords:** Hawaii, First-generation immigrant, Okinawan immigrants, Interview